

第1回 品川区子ども読書活動推進計画策定委員会 会議録（要旨）

日時：令和元年6月17日（月）15時～17時

会場：品川区役所第2庁舎 252会議室

出席者： ◎委員長 ○副委員長

委員	(出席委員) 本城教育次長◎ 島田委員○、豊岡委員、平嶋委員、 巻島委員、廣田子ども育成課長、仁平品川保健センタ ー所長、守田源氏前小学校校長、河野第一日野幼稚園 園長（代理出席）、石井保育教育担当係長（代理出席） (欠席者) 蜂屋戸越台中学校校長
事務局	横山品川図書館長、邑橋事業担当係長、渡辺事業担当 係長、菴原事業担当主査、小田桐主任主事、門脇主事、 林主事、比嘉主事、青木指導主事

傍聴者：1名

1. 委員等委嘱
2. 委員等紹介
3. 委員長挨拶
4. 計画策定のポイント
5. 計画策定スケジュール
6. 品川区立図書館の実績報告
7. 国、都、23区等の子ども読書活動推進計画
8. 7までの報告を含め、委員よりご意見等

<主な意見>

- ・高校生の不読率の高い原因は、勉強や部活で高校生が忙しいからだと思う。
ビブリオバトルなどの読書啓発は全クラスで行っているが、ライトノベルを

よく読んでいるように見受けられる。しかし深い学びになるかどうかは疑問であり、「字を追っている」のみという印象がある。インターネットは調べもので器用に使いこなしているが、内容を伴っていないようにも思う。作文を書くのは不得意だがSNSでは文章をよく書いている。

- 各学校で読書傾向が違う。地域コーディネーターとして関わっている中学校では、生徒が進学前に在籍していた小学校で読書習慣に違いがあるという話を聞いた。学区によって区立図書館が遠いなど利用しやすさがどうしても異なる。読書環境の違いによって本を自由に選べるかどうか異なるなか、共働き世帯も多く、親と一緒に本を読む環境にあるか疑問であり「家読」が困難な場合もある。子どもの読書の道標を計画でどのように示すのかということは検討したい。授業での本の活用について疑問を感じている。タブレットを使うことはできても、必要な情報を適切に入手できているのか。根本的な調べる能力を伸ばす授業になっているのかが課題だと思うので、今回の計画に盛り込めるとよいと思う。
- 学習指導要領改訂で、「主体的・対話的で深い学び」という考えが示された。それに伴い各学校で、学校図書館の活用を進めている。各教科で図書館利用を行い、司書に先生がアドバイスをよく受け有意義な活用を行っている。年2回読書週間を設け、教師による読み聞かせや本の紹介など、子どもたちに多くの読書にふれる機会を各学校で提供している。その中で、家庭の取組が重要になってくると考えており、「家読」の取組は課題になるかと思っている。
- 幼稚園指導要領や保育所保育指針解説でも、物語に親しむことの必要性が明記されている。児童が自分で読むよりも先生の読み聞かせをすることで、その場にいるみんなが物語の世界を共有し楽しんで興味をもってもらおう。児童それぞれの年齢の段階にあったものを読み聞かせしている。そして児童に文字の響き・形などの面白さに興味を持ってもらうなど、様々な取組を行っているが、その成果として子どもに本を好きになってもらえるといい。幼稚園教諭や保育士による読み聞かせだけでなく、ボランティアや図書館員、また地域の小・中学生の読み聞かせも行っている。また、本を通じて自分の興味関心を深められるような身近なところに図鑑や事典を置くなど、環境的な工夫もしている。さらに、家庭における取組を促すため、保護者に対するアプローチも行っている。
- 保健センターには図書室がないので、絵本の引き換えの事業が主となるが、保護者 3,800 人中 95.6%が絵本パックの引換券を配布しており、その年に生まれた子どもの 95%程度が来所するので、ほとんどの子どもに引換券は配布している。それが読書や図書館利用に反映しているのであれば、取り組み甲斐がある。

保健センターでは発語の相談を受けることもあるが、そのような場合には言葉がけの重要性について指導する。読み聞かせは言葉がけの一種なので、その意味でも大切なのではないかと思う。

- ・児童センターにおける子ども向けの読書の機会は概ね好評である。ただ、最近の子どもは忙しいので、本を読む時間も十分に取れないのかもしれない。高学年は習い事、中高生は部活に忙しい。また、保護者に読書習慣があるのかと疑問に思うこともある。保護者が本を読まないために、家庭で子どもが本を手取る環境にないケースも少なくないのではないか。家で本を手取る機会があるのか疑問であり、家読というのはどうであろうか。
- ・保育園に携わっていた頃は、家庭で読み聞かせをすることが難しいことあると思いき、保育園での読み聞かせに力を入れてきた。一斉に読み聞かせるのではなく、少人数での読み聞かせにも取り組んできた。それで事足りると思う保護者もいるようだが、園で読み聞かせした本を貸し出し、子どもが何度も読めるような工夫も行った。また、調べ学習も保育園では行っており、本を読むなかで気になったことを実際に体験するということを促してきた。幼少期のそのような活動が中高生になっても活きるのではないかと思う。
- ・子どもの読書活動に関わる際には、子どもが自分から本に関心を持つように促すように心がけている。その際、アニメーションやビブリオバトルなど、読むというインプットだけでなくアウトプットを重視している。そのほか、やはりスタッフの資質も大きい。子どもの「本当に大切な一冊」を見つけられるように促せれば、不読は止めることができると思う。だから、そのためのスタッフ研修が重要だと思う。子どもにとって調べ学習は大切なものだが、それを支える学校図書館において調べ学習のための資料を揃えることは学校規模によっては難しい場合がある、新しい図鑑や改訂した事典を揃えてほしい。子どもが学ぶ環境を十分に整備できないまま活動だけが先走るケースもあり、気になっているところである。学校図書館については、地域の親子に開放し、いっしょに読書ができる環境として活用していくことも考えられると思う。また家庭教育学習は、親子で読書することが大切であり「継続」することが何よりも大きい。様々な環境や取組によって、読書を通じて子どもの健やかな成長を見守っていきたい。
- ・高等教育は過去10年間で大きく変化した分野である。アクティブラーニングが取り上げられ、大学においても学生が何を学ぶのかということをも重視するようになった。結果、大学図書館の利用も増えているところであるが、読書が好きな学生はそれほど多くはないのが現状である。今回の計画改定においても10代の不読が課題となるようだが、その解決策は子どものなかにしかないのでは、どのように引き出すのが課題になるだろう。

- ・自分としては、学校や図書館における様々な組織が相乗効果を出しつつ、そのなかで家庭が役割を果たしていくことをどのように促すのかが気になっている。
- ・読書にとっては、空き時間のスマホ利用が課題だと思う。特に高校生だが、自校の学生にアンケートをとったところ、男子学生はゲーム、女子学生は動画サイトやツイッターを多く利用することが分かった。その事実を踏まえ、スマートフォンから本にどのように移行させるのかが課題だと思う。
- ・最近、新聞を取る家庭が少なくなっているようだが、学校図書館などで新聞を読む機会をつくっているのか。活字離れが叫ばれている中重要だと思うが。→各学校の判断で置くか否かを決めている。学校でも置いておくことには意味があると思う。
- ・子どもの読書活動の観点でいうと、子ども向けのティーンズに重きを置いている図書館が区内にあると良いのではないか。また、子どもたちはライトノベルやノベライズをよく読んでいるようだが、学校図書館や区立図書館にはそれほど所蔵されていない。それが利用されていない理由のひとつなのではないか。
→ティーンズへの対応については、すでに提案もあり、特化して検討しているところである。

9. アンケート調査の検討

アンケート（案）について内容検討

<主な意見>

- ・事前にご意見で5年生と8年生の設問がいっしょでよいのかという意見をいただいていた。それについては敢えて共通させていて年齢による違いを把握するという意図があつてのことだ。もうひとつ好きな本のジャンルについてライトノベルがどの程度好まれているかを把握できるようにしたいという意見もいただいた。それについては反映したいと考える。
- ・5年生・8年生向け調査について、立地の関係から区立図書館に行きやすい子どももいれば、そうでない子どももいる。そのようなことを尋ねる設問はないのか。また、スマートフォンの利用が読書を阻害しているとも考えられるので、利用時間を尋ねる設問があつてもよいのではないか。
→区立図書館への行きやすさは利用に関係すると考える。直接の設問はないが、区立図書館を利用しない理由として行きにくさを把握するように設問設計をしている。スマートフォン利用については利用時間が読書と相関すると考えられるが、スマートフォンを利用して文章を読むこともできる。設問数の上限もあるが、スマートフォン利用に関する設問は検

討したい。

- どのように本を読んだのかを尋ねる設問の選択肢のなかに「たまたま読んだ」という表現がある。違和感を感じたのだが、どのような意図なのか。
→この設問では主体的に本を読んだかどうかを把握したいと考えている。自分から読んだか、学校での読書活動で読んだのか、またそれ以外なのかという選択肢になっている。質問いただいた「家や教室にあった本をたまたま読んだ」については、偶然手にした本を読んだという内容を意図していた。たしかに「たまたま」という言葉はふさわしくないので検討する。
- 読書に対する関心を尋ねる設問では本を定義せず、直後の読書冊数を尋ねる設問では本を限定している。その後はまた定義しなくなるのか分からず、混乱するのではないか。
→読書冊数を尋ねる設問でマンガ等を除いているのは、国の子ども読書に関する計画で読書の有無を把握する際の本の定義に倣っている。ご質問の内容は定義自体を見直すということか。つまり、設問を通してマンガ等を含まない方がよいという考えか。
- 自分はマンガは人生を学ぶツールとしては、かなり有意義なものと考えている。読書冊数を尋ねる設問では限定しても、他では限定しなくてもよいと考える。混乱を避けるため設問の順番を変えるなど工夫するとよいと考える。
→読書冊数を尋ねる設問のみ限定することが分かるようにしたい。

10. 次回以降の事務連絡

以上